弘　報 168

京都大学大学院理学研究科・理学部

北部構内の樹木

名誉教授：動物学教室出身　西　田　利　貞

広報執筆は初で最後の機会だが，たったの五百字で書けという。不満だけ記すがご寛恕のほどをお願いする。それは，北部構内の樹木である。私が北部で過ごした16年間，すばらしい木々が年々倒されていった。旧動物別館の西側にみごとな榎の大木があり，夏は緑陰に無数のセミが集まった。ここは今西錦司先生が無給講師の時代をすごした建物で，榎は若き今西を見下ろしていたに違いない。別館沿いの銀杏の並木も伐採された。旧２号館の北に毎年美しい紫の花を咲かせた桐の大木が切られたときは，私の秘書が悲鳴をあげて注進に来た。それが普通の感覚であろう。北部には樹木を敵視する人がいるようだ。おおむね，北部の幹線道路の銀杏並木も剪定が行き過ぎており，樹木が矮小化している。東大の銀杏並木や三四郎池の豊かな緑と比べて，大きな相違だ。今出川通りに面した樫の林が切られそうになったときは，私は教室主任だったので制止することができた。落葉が樋に詰まる，道の掃除を毎日しなければならないなどと不平をいう隣接住民の文句に耳を傾ける必要はない。彼らは，緑の巨大な恩恵だけ受けて，わずかなコストさえ払おうとしない人々である。大木を切ってツツジなどの灌木を植える傾向は，日本中に広まっているが，せめて大学くらいは大木を大事にして，昆虫や鳥も安心できる環境にすべきでなかろうか。